



藤原辰史

どれほど心に秘めた思いがあったとしても、言葉としてかたちにしてあげなければ目の前の人には伝わらない。それでも心の奥にしまいこむのは、人間関係が崩れてしまうことを恐れているからである。口に出すということが、幾千の言葉を重ねることでも築き上げた大切な人との関係を崩すのならば、いっそのこと自分の胸のなかに鍵をかけてしまおう、という力が働いたとしても、それは理解しうる。その力は自分の中からやってくる。関係を醸す行為の一つのあり方として、そっとあらわされてくる。

だが、その力が、威嚇とともに外からやってきているのなら話はまったく違ってくる。心の中で自己を牢獄に押し込む力が、たとえば、国家やメディアや所属する組織によって作られているとしたら、あるいはまた、自分の頭の中にいつのまにか検閲所が置かれているとしたら、それは危険である。かたらない思いはとも壊れやすいから、外で作られた「空気に」よって制御されやすい。このとき、あなたの心はもはやあなたのものではない。

「エアコン」時代の体温

外部からの圧力によって人々の思いが萎えてしまい、一つの方向に揃ってしまう現象を、ドイツの哲学者のP・スローターダイクは、『空震』（仲正昌樹訳）のなかで皮肉を込めて「エア・コンディション」、つまり「空調」と呼んだ。当然、彼の母国であるドイツが経験したナチズムの過去をとくに示唆しているのだが、実は、彼の議論は、第一次世界大戦に端を発している。多くの兵士たちの皮膚



たとえば、つい最近日本のある政治家は、言論に圧力をかけることで私たちの内面を制御したいとばかりの表明した。恥を知らない「エアコン」は、いささか故障気味の感否めないが、自然冷却効果の助けを借りて私たちの熱を冷まそうとカタカタ運転中である。

「戦争法案は廃案に！ おおさか1万人大集会」に参加した人たち
11月18日、大阪市北区の扇町公園、本社へから、豊間根功智撮影

日本各地、熱取り戻し心解き放つ

ところが私たちの体温は下がる気配がない。体温がある、ということとは毎日生命にごはんを投じて燃やしているからである。それはつまり、ごはんを食べる。それはつまり、ごはんを食べる。新陳代謝を繰り返して、そのエネルギーで、学び、反省し、計画し、実行し、笑い、泣き、歩いているからである。たしかに私たちは、本物の自由も、本物の平和も、本物の平等もまだ掴んではいない。一度もなかったからこそ、地球上の十億の飢餓も、沖繩を覆う基地と爆音も、福島の立ち入り禁止区域も、オスプレイの飛行も、派遣法の改定も、原発の再稼働も、目の前に存在することを許してしまっている。

けれども、いま、私たちは土壇場で体温を取り戻している。言葉に思いを注ぎ込み、かたみにし始めている。温度が設定された「エアコン」に飽きて、自分の体温に近い言葉を発すること、日本列島各地で空気が蘇生し始めている。「エアコン」に敏感すぎて人に言えなかった言葉を、人に少しずつ伝えることで、心を解き放っている。さて、つぎに解き放たれるのは誰だろう。今年の夏は特別な夏になりそうだ。
（京都都人文科学研究所准教授）

月1回掲載します。藤原辰史さんは今回で終わり、次回からは国文学者の田中貴子・甲南大教授です。

東日本大震災の犠牲者を悼む徳山美奈子さん作曲の「生きてるってなんだろう」、和合亮一さんらの詩に新実徳英さんが作曲した「英霊たちの歌」を西岡茂樹さん指揮の豊中混声合唱団などが歌う。一般2千円、学生千円、要予約。0707-88-1800

大阪的精神」と題して話す。千円。大阪自由大学=06・6386・4575。

●「八月の祈り」 8月8日午後6時半、大阪府豊中市曾根東町3、アクア文化ホール。原爆の悲劇や平和への祈りを描く屋上和彦さん作曲のオムニバス「島の歌」

「大阪精神の系譜 大衆音楽史の8月8日午後2時半、大阪市北区上田安子服飾専門学校本館。フリーの砂古口早苗さんが「笠置シズ子と戦後『おぼの女王』を育てた